

平成 30 年度金沢大学資料館事業報告

The Activity Report of Kanazawa University Museum in 2018

金沢大学資料館館長 奥野正幸*

Director of Kanazawa University Museum, Masayuki OKUNO

* M. OKUNO, mokuno@staff.kanazawa-u.ac.jp. Corresponding author

Abstract

Kanazawa University Museum has held 9 exhibitions such as the permanent exhibition, special exhibitions and outreach exhibitions during April, 2018 to March, 2019 and the number of visitors to University Museum exhibition room was 8,308 which is the second record of the museum. Especially, in the special exhibition “Natural history of stone”, the University Museum presented many precious mineral specimens of Kanazawa University and beautiful jade specimens borrowed from the Fossa Magna Museum of Itoigawa city, Japan. Jade was selected as Japanese national stone in 2016. This exhibition garnered good reviews and 1,415 visitors. The outreach exhibition “Art or Science, the Specific Instrument Collection of the Fourth Higher School” was held at the Intermediateque Tokyo, with cooperation of the museum, the university of Tokyo and the Ishikawa museum of natural history. This exhibition was first challenge in Tokyo. I hope to hold another outreach exhibition in the other cities.

On the other hand, the University Museum also has many archives of histories for many former schools such as the Fourth Higher School and official documents of Kanazawa University and gives their reference activities. The number of documents was 11,000 in 2018. The University Museum offered references of 26 document in 2018. The continuous construction of archives is also important as exhibitions for the University Museum.

The Museum staffs has attended to the meetings for Japanese university museum council and the conference of the society of Japanese museum sciences at Kagawa University.

1. はじめに

ここでは、平成30年度に金沢大学資料館（以後資料館と呼ぶ）が実施した事業全般について概観する。平成30年度も、資料館では、展示室における常設展、企画展、特別展に加えアウトリーチ展等、計9回の展覧会を開催し、資料館展示室の入館者数は平成29年度に次いで過去2番目に多い8,308名を数えた。特に、秋に開催した特別展「石の博物誌」では、平成28年に本学で開催された日本鉱物科学会総会において、日本の国石として選ばれた「翡翠（ひすい）」を始め、金沢大学の貴重な鉱物標本等を展示し好評を博した。この特別展に合わせて、翡翠に関する特別講演会を開催した。さらに、アウトリーチ展の新たな試みとして、東京大学総合研究博物館及び石川県立自然史資料館との共催で東京丸の内にあるインターメディアテクを会場に「アートか、サイエンスか—知られざる四高遺産から—」と題して、資料館と石川県立自然史資料館が保有する旧制第四高等学校の物理実験機器のなかから約50点を厳選し、展示した。東京での共催展覧会の開催は、資料館としては初めてのことであったが、このような県外での展示活動を実施することにより、資料館が所蔵する貴重な資料をより広く知らしめ資料館の知名度を上げることができたと考えられ、今後実施したい。また、資料館展示では、恒例となった博物館実習生による「学生企画展」の四回目となる展覧会が開催された。

他方、資料館では、多くの歴史史料・大学文書を保有するアーカイブズの機能も有しており、リファレンス活動も実施した。このほか、大学博物館等協議会や博物科学会のメンバーとして活動を行った。

また、平成29年度に着任した特任教員が、外部資金を獲得したことも注目に値する。今後益々必要となると予想される外部資金の獲得の可能性を広げた。

本稿では、平成30年度の資料館活動全般について、個々に報告する。

2. 平成30年度の展示活動の概要

ここでは、平成30年度に行った資料館活動の中で展示活動等の成果について報告する。平成30年度資料館展示室では、常設展・企画展及び特別展ならびに展示に関連する講演会等を開催した。平成30年度は、資料館展示室において計6回の展覧会を開催した。アウトリーチ展については、金沢城公園河北門での出張写真展、石川四高文化記念交流館での企画展を開催した。また、東京大学総合研究博物館及び石川県立自然史資料館との共催展覧会をインターメディアテク（東京丸の内）において開催した。以下に、それぞれの展覧会等の概要と特徴を報告する。

2-1 資料館常設展（資料館展示室）

資料館収蔵庫が狭隘であることや展示物が大きいことから、加賀藩校扁額、旧制第四高等学校扁額、金沢工業高等学校のシャンデリア、龍護寺の木製仏像群などの大型の展示物は収蔵庫に移動することができず、常設展示の公開もしくは展示室内での保管（パネルで囲う）をしている。そのため、旧制第四高等学校物理実験機器や考古資料など比較的小さな展示物のみを、入れ替えて常設展示を行っている。このような理由から、基本的には、平成27年度以降大きく展示内容が変わっていないので、その詳細については「平成27年度金沢大学資料館活動報告」（文献1）を参照いただきたい。

2-2 春季企画展「金大資料館コレクション展2018：保存と修復」（資料館展示室）

平成30年3月28日から7月4日にかけて、「金大資料館コレクション展2018：保存と修復」を開催した。コレクション展は、平成27年度から毎年開催され4回目の開催であった。今回の展示では、資料館に収蔵されている様々な学術資料について、「保存と修復」をキーワードとして、その保存と修復の手法を含めて紹介した。資料はいかに丁寧に扱われても長期間の展示や保管によって多かれ少なかれその劣化や破損を免れることは難しい。従って、収蔵資料を永年に渡り展示するためには、資料をいかに劣化させずに保存するかが重要である。今回の企画展では、資料館の考古資料・紙資料・生物標本を展示し、その保存や修復のための手法について紹介した。

考古資料については、埴輪や縄文土器を取り上げ、遺物に加えて発掘した遺物の記録保存方法と機器ならびに遺物の接合・復元方法とその材料について展示及び解説が行われた。紙資料については、修復を行った「成医学校蔵版人体局所解剖図」及び「新刻日本輿地路程全図」を展示し、これらの修復を行った石川県文化財保存修復工房による修復過程を紹介した。さらに、紙修復のための打刷毛（はけ）等の修復道具も併せて展示された。また、生物標本としては、液浸標本、乾燥標本、樹脂固定標本、プラスティネーション標本等さまざまな標本が展示された。特に、プラスティネーション（Plastination）標本作成法は、動物の遺骸に含まれる水分と脂肪分をプラスチックなどの合成樹脂に置き換えて標本を保存するユニークな方法であり、金沢大学環日本海環境研究センターの協力を得て、トビウオ等の生きているかのような標本を展示するとともにその作製方法を作成道具やシリコン溶液などの標本作成用の溶剤の展示とともに解説した。

この企画展により、来館者に資料をいかに保存・修復していくかが博物館の重要な役割であることを広く知ってもらうことができたと考えている。その結果、今回の春季企画展の入館者数は、70日間で2,405名を数えた。



写真1 金大コレクション展2018：保存と修復 ポスター

2-3 夏季企画展「お雇い外国人と石川の近代教育 ～ランバート、ホイットニー、ウインの仕事～」 (資料館展示室)

この夏季企画展は、平成30年1月から2月にかけて、石川四高記念文化交流館で開催した同じタイトルのアウトリーチ展(文献2・3)の展示内容を一部リメイクして、資料館展示室において平成30年7月11日から9月12日まで開催された。また、この企画展は、前回同様北陸学院ウイン館及び石川県立自然史資料館の協力を得て実施された。

この展覧会では、明治時代初期に石川の近代教育の一端を担った3人のお雇い外国人(ランバート、ホイットニー、ウイン)の足跡ならびに功績を写真やパネルで紹介した他、当時の教材等の展示も行い、お雇い外国人の働きと明治初期の石川の教育を紹介した。この展覧会は、金沢大学の前身校の歴史を金沢大学の学生に紹介することを目的として企画されたが、学生のみならず、夏休みに金沢大学を訪れた方々にも立ち寄っていただけ、42日間に1,413名の入館者があった。

2-4 ワークショップ「縄文時代のあみもの体験！」(金沢大学附属中央図書館及び資料館展示室) (文献4)

平成30年8月21日に夏休み特別企画として主に小学生を対象とした、資料館では初めてのワークショップを開催し、保護者を合わせて28名の参加者があった。

参加者は、ワークショップに先立って資料館展示室に展示されている縄文土器等、さまざまな考古資料・歴史資料を見学し、時代をさかのぼりながら縄文時代の生活を把握した後、編みものの圧痕が残る縄文土器を見学し、編み物技術を学んだ。その後、会場を附属中央図書館に移し、参加者は縄文時代のあじろあみの手法でコースターを作成した。初めてのワークショップは親子で楽しみ、大成功であった。



写真2 ワークショップ「縄文時代のあみもの体験！」の様子(文献5より)

2-5 特別展「石の博物誌」(資料館展示室)

平成28年9月に金沢大学で開催された日本鉱物科学会総会において、日本の国石として「翡翠(ひすい)」が選ばれ、また、これに先立って日本地質学会が「県の石」を選定し、石川県の石として金沢大学理工研究域地球学教室が推薦した「珪藻土」と「霰(あられ)石」が選ばれた。この特別展「石の博物誌」では、国石「ひすい」および石川県の石「珪藻土と霰石」を中心に、第四高等学校等の前身校から本学に引き継がれた貴重な石(鉱物)標本を展示するとともに、現在ではほとんど

ど稼働していない北陸地方の鉱山を紹介し、そこで産出した鉱石を展示した。ひすい標本については、新潟県糸魚川市フォッサマグナミュージアムの協力を得て借用した白色、緑色および紫色の標本を展示し、その生成過程についてもわかりやすい解説がなされた。また、第四高等学校旧蔵の大型の「輝安鉱」標本は、世界でもめずらしい生成の状況が分かるものである。

さらに、石でできた考古資料を展示し、縄文時代以降における石の文化を紹介した。本特別展により、見学者が翡翠や水晶に代表される天然の石の美しさや生成の神秘を知り、また、古代から人類の歴史を左右し、現代のIT社会の基礎となる原料としての石について理解を深めることができたと考えている。この特別展は、平成30年9月19日から10月28日（37日間）にかけて開催され、1,415名もの入館者があり好評であった。

この特別展の内容については、図録「石の博物誌」が資料館Webサイトに掲載されているので、参考にされたい。（文献6）



写真3 特別展「石の博物誌」のテレビ取材の様子（文献7より）

2-6 特別講演会「国石翡翠の価値」（中央図書館AV室）

平成30年度資料館特別展「石の博物誌」の開催に合わせて、平成30年10月15日に、特別展の展示に協力いただいたフォッサマグナミュージアムの宮島宏先生を講師に招き、中央図書館AV室を会場に、「国石翡翠の価値」と題した特別講演会を開催した。講演では、翡翠の特徴と見分け方、翡翠（ひすい）が国石に選定された経緯等について貴重なお話をしていただいた。当日は、「石」に興味を持たれる一般の方々の来聴者も多く、41名の参加者があり、好評を博した講演会となった。

2-7 出張写真展「あこのころの金沢大学」（金沢城公園河北門）

本出張展示「あこのころの金沢大学」は、平成30年10月19日から11月5日にかけて金沢城公園河北門において開催された。河北門での開催は、3回目となった。例年、金沢大学のホームカミングデー（平成30年10月26日）の開催に合わせて開催している。前回までは、「よみがえる城内キャンパス」と題して、城内キャンパス中心の写真展を開催してきたが、今回から同窓会からの意見を反映し、メインキャンパスが城内にあった頃の金沢大学の他のキャンパス等にも焦点を当て、新たな写真を加えて紹介した。18日間の開催期間中に15,162名の入場者があり、同窓生だけでなく多くの市民や観光客の方々にもご覧頂き、金沢大学の歴史を知っていただけたことは非常に意義があったと考える。

2-8 金沢大学美術教育専修同窓展 i-Acanthus Ars 2018 (資料館展示室)

例年開催され、金沢大学人間社会学域学校教育学類美術教育専修の学生、教員及び卒業生による作品の展覧会である。会場には、絵画、彫刻、デザイン、写真、工芸などの作品約30点が展示された。平成30年11月1日から9日にかけて開催され264名が鑑賞に訪れた。

2-9 学生企画展「物録 (モノログ) —資料達の波瀾万丈な「モノ」ガタリ」(資料館展示室)

学生企画展は、平成26年度から学芸員資格の取得を目指す学生の博物館実習のまとめとして毎年開催されている。平成30年度は、平成30年11月16日から平成31年1月29日にかけて開催され、2,603名の入館者があった。この展覧会は、博物館実習の受講生が企画・立案・資料収集から実際の展示までのすべてを手掛けた学生自身によるものである。今回の企画は、資料館に収められている資料の来歴にスポットを当て、資料館に収蔵されるまでの紆余曲折のストーリーを紹介したものである。平成31年度に設立30周年を迎える資料館は、今まで数多くのモノ資料を収蔵、調査、展示してきた。その収蔵品には、資料館に収蔵されなければ、忘れ去られそのまま打ち捨てられてしまったかもしれない資料もある。その中に、木製仏像群やキノコムラージュ標本などがあり、その数奇な運命を資料自らが語るというスタイルの展覧会であり、非常にユニークなものとなった。

また、この展覧会に合わせたミュージアムツアーや実際に展示した魔鏡を参加者が作成するワークショップも開催され、好評を得た。



写真4 学生企画展ポスター



写真5 魔鏡を自作するワークショップ参加者 (文献8)

2-10 アウトリーチ展「バンカラ寮生類 ~金大寮史125年~」(石川四高記念文化交流館)

平成29年度に開催した学生企画展「バンカラ寮生類 ~金大寮史124年」(文献9)を一部見直すとともにコンパクトにまとめ、タイトルの後半を「~金大寮史125年~」と改めてアウトリーチ展として実施した。平成31年1月18日から2月17日に開催され、2,603名の入館者があった。

詳細な内容については、文献6を参照頂きたいが、29年度の展覧会は金沢大学にあった寮での集団生活を紹介したもので、元寮生など同窓生の注目を集めた。その展覧会の時と同様に、このアウトリーチ展もOBに好評であったことに加えてテーマが石川四高記念文化交流館の展示趣旨とも合致し多くの地域市民の皆様にもご覧頂けた。このことは、資料館が進めている地域の文化施設との連携事業の有効性を示す結果となった。

2-11 冬期企画展「稲作と中国文明」(資料館展示室)

平成31年2月7日から3月17日にかけて、科学研究費補助金の新学術領域研究「稲作と中国文明—総合稲作文明学の新構築—」のグループ(代表者:金沢大学 中村慎一教授)との連携企画展として「稲作と中国文明」が開催された。この展覧会は、最新手法を用いて得られた調査・研究の成果を紹介したものである。資料としては、現地での実測データに基づいて作成された、中国新石器時代の「亀形土器」、「骨耜」、「蝶形器」等の3次元レプリカが展示された。この冬期企画展の入館者数は、28日間で547名であった。

2-12 東京大学総合研究博物館・金沢大学資料館・石川県立自然史資料館共催展

「アートか、サイエンスか—知られざる四高遺産から—」

(インターメディアテク;東京)

この展覧会は、東京大学総合研究博物館から、資料館及び石川県立自然史資料館に開催の提案があり実現した。東京丸の内のJPタワー/KITTE内に設置されたインターメディアテク¹⁾・GREY CUBEを会場に、資料館と石川県立自然史資料館が保有する旧制第四高等学校(四高)の物理実験機器の中から約50点を厳選して展示した。この実験機器群は、国内有数のコレクションであり、そのうち269件が金沢大学資料館の資料アーカイブで公開されていたが、その現物がまとまって学外で展示されたことはなく、広く一般に知られていなかった。今回の展覧会を通じて、非常に多くの方々に認知されることとなった。また、今回の展示は歴史的価値とともに、その特徴的なデザイン性についても知らしめることも目的とした。この展覧会は、平成31年2月16日から令和元年5月12日まで開催された、その間のインターメディアテク全館の入館者数は101,708名であった。さらに、この展覧会に合わせて平成31年4月26日と令和元年5月10日に講演会が開催された。講演会の様子については、別の機会に報告することとしたい。

2-13 金大資料館コレクション展2019:保存と修復 第二章」(資料館展示室)

このコレクション展は、2019年度の春季企画展であるが、開会を早めて平成31年3月28日から令和元年6月28日まで開催した。この企画展は、平成29年春に開催した「保存と修復」展の続編として、日本の和紙、エジプトのパピルス、および考古遺物の金属製品についてその保存と修復について紹介した。なお、展示の詳細については、2019年度の事業報告の中で詳細を報告する予定である。

3. その他の主な活動等

平成29年度の事業報告(文献10)にあるように、資料館の活動は資料の収蔵・保存及び展覧会の開催だけでなく、もう一つの大きな役目として文書館の機能があるとともに、教育・地域貢献など様々な事業を実施している。以下に、平成30年度の展覧会事業以外の主要な活動の概略を報告する。

3-1 公文書の保管と閲覧業務

資料館は、モノ資料の収蔵、保管、展示の他、もう一つ重要な機能である、金沢大学およびその前身校に関する公文書の収集保管閲覧事業(アーカイブス事業)を行っている。資料館では、「公

文書の管理に関する法律」(以下、公文書管理法と呼ぶ)の施行(平成22年度末)前に移管された第四高等学校等の公文書等の多くの貴重な文書を収蔵しており、これらの文書リストは「非現用文書データベース」として公開している。平成30年度これらの文書資料など(モノ資料を含む)に関する閲覧等の問い合わせへの対応(リファレンス)件数は、39件、文書点数26点、モノ資料点数91点であった。ただし、平成30年度末時点で、資料館は「公文書管理法」に対応した「国立公文書館等」の指定を受けていないため、貴重な大学史資料が廃棄されることを防ぐことを目的として、保存期間が満了した法人文書のうち重要な文書を選別し、学内で一定の手続きを経たうえで、資料館において現用文書として保管を行っている。しかし、現用文書としての保管には資料館にそぐわない点も多いため、早急に「国立公文書館等」の指定を受けることが望ましいと考えている。

3-2 資料の整理・修復

資料館には、平成30年度末の時点で約88,518点の(学術及び文書)資料が収蔵されている。これらの資料の整理作業は、現在も行われており、平成30年度には新たに49点の資料の整理が完了した。平成30年度は、修復事業は実施しなかったが、今後、文書や掛図資料などの紙資料を中心に、修復が必要な資料については順次修復を実施したい。

3-3 平成30年度に移管または寄贈された資料

平成30年度に、移管または寄贈された資料は5件・49点に上った。その中には、非常に美しい正倉院ガラス器複製品及び復元品計8点も含まれている。

3-4 外部資金の獲得

平成30年度の資料館関係者の外部資金の獲得は、松永篤知特任助教が以下の2件の助成金を獲得した。寄付金等はなかったが、今後の資金獲得のためにクラウドファンディングの情報収集を行った。

資料館の松永篤知特任助教は、石川県博物館協議会職員研究奨励事業に採択された。研究テーマは、「四高考古資料の整理と研究」であり、金額は7万2千円であった。なお、本研究の成果発表は、石川県立歴史博物館で開催された令和元年度石川県博物館協議会の総会で行われた(文献11)。また、きょうこう奨励金給付(公益財団法人日本教育公務員弘済会 石川支部)にも採択された。テーマは「縄文時代の編物を題材とした考古学ワークショップの実践」であり、金額は5万円であった。本奨励金によって前述のワークショップ「縄文時代のあみもの体験!」が実施された(文献4)。

3-5 授業等への協力・社会貢献

資料館では、平成30年度は以下のような授業等への協力を行った。

- ・人文学類の「地域概論」の一コマを担当、資料館の概要説明と展示室及び収蔵庫の見学を実施した。(受講者140名、4月18日)
- ・新入生の初学者ゼミ(第1回:4月16日、60名;第2回:4月23日、20名)を実施し資料館展示室及び収蔵庫の見学を実施した。
- ・博物館実習の授業(29名)では、資料館の収蔵庫や資料整理などのバックヤードツアーを4月25日実施した他、最も重要なテーマである学生企画展「物録(モノログ)―資料達の波瀾万丈な「モノ」ガタリ」の実習作業の指導補助を行った。

・松永篤知特任助教を中心として、大学コンソーシアム石川の授業「金沢の歴史と文化」が開講され、11名の受講者が参加した。最終回の8月9日には、受講生が資料館を訪れ、松永特任助教の講義を受け、その後資料館を見学した。

3-6 情報発信

平成29年度と同様に、以下のような情報発信事業を行った。

- ・『資料館だより』（第56号：5月発行、第57号：9月発行、第58号：1月発行）

資料館だよりは、資料館の広報誌であり、資料館が実施している展示・講演会活動の開催案内及びその開催報告及び取材報告だけでなく、資料の移管・寄贈の状況、資料館訪問者に関する報告を掲載した。また、資料館職員や資料館実習学生の感想なども紹介した。

- ・特別展図録『石の博物誌』（9月発行）

平成30年9月19日から10月28日まで開催された特別展についての図録であり、展示物の概要だけではなく、主要な展示物であった「翡翠」について、その生成過程や色の原因、いかにして国石に選定されたかなど専門的な事項などについて興味深い記事が分かりやすく掲載されていた。

- ・『金沢大学資料館リーフレット』

来館者に配布するために、日本語版及び英語版がある。

- ・『金沢大学資料館紀要 第14号』（3月発行）

第14号には、藤原氏によるお雇い外国人のE.B.ランバートの石川及び日本での足跡を詳細に調査した論考、平成29年度の博物館実習を企画実施した学生等による論考「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」、松永氏による論考「金沢大学資料館所蔵考古資料に関する調査研究2018」ならびにワークショップの報告、及び平成28年度に続き資料館館長による、平成29年度金沢大学資料館事業報告が掲載されている。

3-7 学会および研修会等参加活動

資料館では、資料館職員の資料館業務についての知識や技術の向上及び他の博物館・文書館との情報収集や情報交換を目的として、様々な会議、学会および研修会などへ積極的に参加している。平成30年度の主な参加学会等について、以下に報告する。

- ・全国博物館館長会議

平成30年度第25回全国博物館館長会議が、7月14日に文部科学省講堂において開催され、全国の博物館等から400名近くの館長等が出席し、資料館館長が出席した。本会議は、日本博物館協議会・文部科学省・文化庁の共催で開催された。被災ミュージアム復興事業、新しい文化庁の体制、及びICOM京都大会2019の詳細について説明があり資料館としても重要であると思われた。さらに、READYFOR株式会社CEOの米良はるか氏によるクラウドファンディングの紹介は、資料館の今後の資金獲得の手段としてクラウドファンディングは考慮する価値があると感じた。

- ・大学博物館等協議会第21回大会及び第13回日本博物科学会 香川大会

大学博物館等協議会第21回大会及び第13回日本博物科学会が平成30年6月21・22日に香川大学幸町キャンパスで開催され、本学からは資料館長他4名が参加した。この協議会では「大学

博物館と地域との連携」と題したシンポジウム講演が行われ、その後討議・意見交換がなされた。シンポジウム終了後、大学博物館等協議会館長会議及び日本博物科学会理事会が開催された。その後、大学博物館等協議会総会と日本博物科学会の総会が開催された。翌日（6月22日）の日本博物科学会の研究発表会では、9件の口頭発表と8件のポスター発表があった。資料館からは、松永教員による「金沢大学における資料館・埋蔵文化財調査センターの連携」と題した口頭発表が行われた。その後、特別名勝 栗林公園の見学ツアーがあり、散会となった。

・平成30年度石川県博物館協会実務担当者会議

平成30年度石川県博物館協会実務担当者会議は、平成30年12月25日に石川県歴史博物館・ワークショップルームで開催され、資料館からは藤原氏と菊間氏が出席した。

4. 来館者

一般の来館者以外に、大学及び資料館の事業に関連した来館者について報告する。

・7月5日に、夏季短期留学プログラムで来学中の南開大学（中国天津市）の学生14名及び教員2名が来館。

・7月12日に、本学の特別講演会「ホンジュラスー日本の二国間関係の展望とユネスコ事業について」のために来学した駐日ホンジュラス共和国特命全権大使のアレハンドロ・パルマ・セルナ氏が来館。

・同じく7月12日には、マケドニア共和国オフリド・イコン美術館の顧問学芸員であるミルチョ・ゲオルギエフスキ氏が来館。同氏は、本学の超然プロジェクト「文化資源マネジメントの世界的研究・教育拠点の形成」事業で来学されていた。

・8月9日には、前述の大学コンソーシアム石川の授業「金沢の歴史と文化」の受講生11名が来館。

5. まとめ

最後に、平成30年度の資料館活動についてまとめておく。すでに、言及したように、平成30年度の資料館展示室への入館者数は、平成29年度の入館者数8,990名に次ぐ過去2番目に多い8,308名の入館者数を数えた。年間入館者数は、平成27年度以降8,000名前後の高い水準を維持している。このことは、平成30年度の展示が引き続き高い質を維持し、適切な広報の効果があったこと示すものであると考えている。特に、春季企画展及び学生企画展の入館者数が、2,000名を上回ったことが大きく貢献している。また、特別展は、資料館以外の部局で保有する鉱物標本に加えて、他館の質の高い翡翠の標本を展示できたことが学内者だけでなく学外の入館者の増加につながったと考えている。また、資料館が収蔵する多くの資料は前身校由来の歴史資料がほとんどであり、自然史標本が学内者の興味を引いたと思われる。

3回のアウトリーチ展については、金沢城内河北門で開催した大学資料館写真展「あのころの金沢大学」には15,162名、石川四高記念文化交流館で実施した企画展「バンカラ寮生類～金大寮史125年～」には2,603名の入場者があった。また、東京のインターメディアテクで東京大学総合研究博物館及び石川県立自然史資料館との共催企画展「アートか、サイエンスかー知られざる四高遺

産から一」が開催された。これらアウトリーチ展の入場者数が多い原因は、その会場が金沢市街や観光地にあり、立地条件の良さが大きく影響していると考えられ、今後も、市街地でのアウトリーチ展を続けることにより資料館の知名度を上げることができ、ひいては、郊外にある金沢大学資料館にまで、足を運んでいただけるようになると期待される。また、社会貢献や金沢大学のステータスの向上につながるものと期待している。さらに、他大学の博物館との共催企画展は初めての試みであり、今後も他大学との連携が重要であると感じた。

他方、本稿では例年の報告同様、展覧会活動以外の多くの活動について報告した。その中で、公文書資料については金沢大学の歴史や意思決定のプロセスを後世に伝えていくうえで非常に重要であるにも関わらず、資料館が国立公文書館等の指定を受けていないことが、今後その系統的な収蔵やリファレンス活動の障害となることが心配される。資料館としては、一刻も早く国立公文書館等の指定を受けることが望まれる。

註

- 1) 日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館が協働で運営する学術文化総合ミュージアム

引用文献

- 1、奥野正幸、平成27年度金沢大学資料館活動報告、金沢大学資料館紀要、12号、21-29、2017年
- 2、金沢大学資料館、お雇い外国人と石川の近代教育 ～ランバート、ホイットニー、ウィンの仕事、金沢大学資料館だより、55、4、2018年
- 3、藤原真理、お雇い外国人 E.B. ランバートの足跡～連携企画展実施にあたっての調査から～、金沢大学資料館紀要、14号、1-17、2019年
- 4、松永篤知、縄文時代の編物を題材とした考古学ワークショップの実践 金沢大学資料館紀要、14号、51-60、2019年
- 5、金沢大学資料館、小学生が「縄文時代のあみもの」を体験、金沢大学資料館だより、57、1、2018年
- 6、金沢大学資料館、平成30年度金沢大学資料館特別展「石の博物誌」図録、2018年
- 7、金沢大学資料館、資料館特別展「石の博物誌」を開催、金沢大学資料館だより、58、1、2019年
- 8、鈴木 彩可、米田 結華、室谷 颯花、北澤 怜子、笠原 健司、菅原 裕文、河合 望、学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」、金沢大学資料館紀要、14号、19-38、2019年
- 9、金沢大学資料館、「物録（モノログ）－資料達の波瀾万丈な「モノ」ガタリ」開幕、金沢大学資料館だより、59、2、2019年
- 10、奥野正幸、平成29年度金沢大学資料館活動報告、金沢大学資料館紀要、14号、61-70、2019年
- 11、松永篤知、四高考古資料の整理と研究、石川県博物館協議会々報、第84号、2-3、2019年